

かけがえのない故里で

藤岡市立鬼石中学校

三年 須田 くるみ

私の家は今年では百年を迎える老舗のおまんじゅう屋です。父が四代目で兄が五代目を継ぐことになっています。店は人里離れた山の中にあり、私はそこで家族とともに暮らしています。そんな不便な場所にあっても、おまんじゅうを買いにたくさんのお客さんが足を運んでくれます。お客さんが好んで買ってくれる我が家のおまんじゅうを私は誇りに思います。

家の仕事は、土・日・祝日がとても忙しいので、家族で遊びに行った記憶がありません。夏休みの思い出を書いてくる宿題ができません、悩んだこともありました。もっと町の方に住んでいたら、友達とすぐに遊べるし、買い物もすぐにできるのに、なんで山にいるのだろうか、小さい時はとても不満に思っていました。けれども、おまんじゅうを買いに来るお客さんの思い、おまんじゅうづくりに情熱を傾ける家族の思いを考え

ると、その不満とは別の思いが私の心に芽生えてきました。

不便な山の中にあってもお客さんが我が家のおまんじゅうを買いに来る理由を、私なりに考えてみました。すると、我が家には三つのサプライズがあることに気づきました。一つ目はこんな山奥でおいしいおまんじゅうにめぐり逢えること、二つ目は私の祖母から地元の話聞いてほっこりできること、三つ目は祖母の作った手料理とお茶が振る舞われること。この三つのサプライズを提供されたお客さんは、とても喜んでくれます。そして、リピーターとなって来てくれます。この三つはいつでもできるわけではありませんが、お客さんの心に残る我が家のおもてなしなのです。おまんじゅうを売って、その利益で私たち家族は確かに生活をしていきますが、それ以上にお客さんのために何か役に立ちたいという思いが、この三つのサプライズの源だったのです。

また、我が家のおまんじゅうは、地元の方々が別の地域の方へのお土産にすることで、広まることができ

ました。そんな地元の方々に恩返しをしたいと、父や私たち家族は大きな夢を描いています。

それは、仕事がしたくても子育て中でできない人、定年だけどもまだ仕事をしたい人、仕事が見つからない人、そんな人たちのために大きな土地を耕し、花や野菜をつくり、それを売ったり、収穫した食材を使った食事を出したりするなど、その人たちの力で経営していくことができる、そんな施設を作っていくという夢です。様々な理由により鬼石地区を離れていった人たちも、生まれ育った故里への愛情はもっています。この場所で生活できるという自信さえあれば、人は離れていきません。父の夢であるそんな施設ができれば、鬼石地区に残る人が増えると私は思います。とてつもなく大きな夢ですが、その父の夢をいつか実現できるように、私たち家族はサポートしたいと考えています。私自身も、将来どのような職業に就くかは、具体的に決まっていますが、父の夢の役に立てる人になりたいと考えています。

私の住む鬼石地区はだんだん人が少なくなり、新し

い人がなかなか入ってきません。私が大人になったとき、鬼石地区はどんな風になっているのでしょうか。人口は減っているのか、人が仕事できる職場はあるのか、小学校や中学校は閉鎖されていないだろうか、その場所で私はどのように生活しているのか、少し不安になります。人口の減少、少子高齢化。それは鬼石地区に限ったことではなく、群馬県内、日本全国でも深刻な問題となっています。

だからこそ、せめて私たち子どもが地元で仕事をし、そこで家庭を築いて人を増やしていく、それも一つの地域への恩返し、地域への貢献なのだとは考えます。私は家族もいるこの自然豊かな故里、鬼石地区が大好きです。私はこれからも家族と協力して、三つのサブライズをお客様に提供できるように、父の夢を手助けできるように、この故里にしっかり根を張って生活をしていきます。かけがえのない故里を守ることができるのは、私達なのだから。